

Southeast Asia Regional Network

News Letter

VOL.20
SEPTEMBER.2025

CONTENT

1. 交流会レポート
2. タイの昨今 (第20回)
3. 同窓生リレーインタビュー
4. 狙え！インスタ映え!? (第16回)
5. とともに感じる東南アジア (第16回)

事務局からごあいさつ

みなさん、こんにちは！

2025年度もあつという間に下半期が目の前ですね。さて今回もメンバーのご協力のもと、支部ニュースレター第20号を発行することができました。今後も同窓生同士のネットワークを維持し、さらに開拓していけるよう活動が続けていきたいと思います。今後も「東南アジア愛」を皆さんに届けていきますので、応援の程よろしくお願いいたします。

1. 交流会レポート

◆ 現役宇大留学生送別会 ◆



25年4月26日タイ・バンコクにて、タイ在住宇大同窓生参加の元、農学部名誉教授・後藤先生及びタイのカセサート大学での留学期間を終え日本に帰国される国際学部生との懇談会・送別会を開催しました。2学期間のタイ生活ではたくさんの出会いと日本では得られない貴重な経験ができたことと思います。これからキラキラした fresh eye を持ち続け世界を広げていってほしいと思います！

2 タイの昨今 ~第20回~



一変わりゆくお葬式の形一

皆さんはタイのお葬式に参列したことがあるだろうか？身内は言わずもがな、振り返ってみると、特に職場関係のご両親の葬儀に参列する機会が多いことに気づく。この理由にはタイの葬儀の特徴ともいえる「主催者」の存在がある。タイの葬儀は数晩に渡って執り行われるが、毎晩「親族」「職場」「友人」などと「主催者」が変わる。この「主催者」とは、毎晩執り行われる儀式への参列とその費用負担などを担う人のこと。親が亡くなった場合は子供の職場が一晩「主催者」を申し出るのが常で、そのタイミングで職場同僚が参列することになるのである。では葬儀会場が他県となると「職場主催」はどうなるのかというと、同僚の参列は無理でも上司はできるだけ参列する。

現にブーケットで執り行われた義親の葬儀に夫の上司がわざわざバンコクから参列してくれたほどだ。それほどまでにこの「主催者」の存在は重要視されている。一方で、時代と共に葬儀のシンプル化が進んでいる。タイのお葬式（以下仏式限定）とは一般的に、
①お寺で数日に渡って執り行われる
②日によって主催者（身内・勤務先など）が変わる
③儀式（読経）への参列は18-19時頃
④参列者への食事提供
⑤香典返し（ささやかな小物）がある
というのが基本形態なのだが、特にバンコクではコロナ禍も後押ししてか、葬儀日数が短縮され、食事提供

もスナックボックス配布へと代わり、基本形態を維持しつつもシンプル感が感じられるように。そんな中、先日参列した同僚のご尊父様の葬儀で今までにないシンプル形に遭遇！葬儀会場はお寺に併設された数階建てのビル。エスカレーターで式場に向かう様はどこかの洗練されたホテルの如く。式場前の液晶パネルに儀式的スケジュールが表示され、クーラーで冷えた会場内に灯されたロウソクと線香はLED仕様。読経手短にお坊さんの説教含め儀式はなんと30分で終了。スナックボックス提供や持込供花NG。おそらくこれはお寺の葬儀パッケージかと。核家族が進み、効率化を重視する次世代葬儀の先駆けを見たようなそんな未来のお葬式を予感させる貴重な体験でありました。（大畑）



東南アジアへの想いを共に発信していく仲間（国際学部・院同窓生）を募集しています！

宇都宮大学国際学部・国際学研究科同窓会東南アジア支部は、同窓会本部承認のもと2017年8月に創設されました。東南アジアをこよなく愛する同窓生のネットワーク再構築を目指し、2017年9月よりニュースレターを年2回（4月・9月）発行しています。国際学部で東南アジア愛を培った同窓生のみなさまとともにつながり、ネットワークを広げいくべく活動が続けていきます。このニュースレターが一人でも多くの同窓生に届き、さらに東南アジア愛を通じてネットワークが広がっていくことを願っています。

興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひ事務局兼ニュースレター編集係までご連絡ください。

数多くの同窓生からの声をお待ちしています！

事務局：大畑（miyukiohata@gmail.com）

現メンバー（16名）▶大畑美優紀 95・マリー/藤田研▶田通知成 96・小池研▶ROMANOV（當眞）里絵 96・佐々木（史）研▶栗林（泊）祥子 96・梅木研▶平田勝博 97・友松研▶本間みずほ 97・田巻研▶原理恵 98・藤田研▶谷澤壮一郎 02・石濱研▶大宮勇樹 06・マリー研▶知念（高田）知佳 00・田巻研▶諸頭（岩山）晴奈 05・阪本研▶小沼洋子 97・藤田研▶藤井満春 00・友松研▶佐々木哲夫 99・藤田/中村（祐）研▶駒形麻朋実 17・田巻研▶柴田（佐々木）友美子 06・重田研（※数字は入学年度）

同窓生リレーインタビュー

●● 現在東京にてご活躍の原理恵さんにインタビューです ●●

Profile

原 理恵さん

Rie Hara



- 東京都出身
- 国際社会学科 1998年度入学
- 藤田研究室

▶ 宇都宮大学国際学部を選んだ理由は？

高校時代から歴史の授業が好きでしたが、特に現代史以降の内容にもっと触れたいという思いがありました。世界で起きていることを深く理解したいという関心から、国際的な視点で学べる宇都宮大学国際学部を選びました。海外への興味も強く、語学や国際関係を学べる環境が整っている点に魅力を感じました。

▶ 大学時代に没頭していたことや思い出は？

第二外国語でタイ語を専攻し、大学祭ではタイ料理を作ったり、タイ・シーサケート県の小学校を訪問して翻訳した絵本を届けたりしました。国境近くの村で、子どもたちがカンボジア語も話すバイリンガルだったことが印象的です。1年間のカセサート大学への留学も貴重な経験で、言葉が少しずつ理解できるようになった頃には「またタイに来たい」と強く思うようになりました。



学際でタイ料理を作った時のひとコマ(各国の留学生たちと)



▶ 大学卒業から現在までの道のりは？

卒業後は栃木県内のメーカーで数年働きましたが、タイへの思いが募り、バンコクで就職活動をして日系商社に現地採用として入社しました。

明るく楽しいタイ人の同僚たちと、クーデターや大洪水など様々なトラブルにも対応しながら働くうちに、気づけば10年が経っていました。タイ以外の国での仕事にも興味が湧き、日本のカウンターパートの部署へ転職し、現在に至ります。タイでは「サヌック(楽しい)」「サバーイ(快適)」が大切にされていて、仕事は楽しくするもの!であり、職場はいつもにぎやかでした。

現在の東京の職場はタイに比べるととても静かです。考え方の根底は似ているとおもいますが、表現の仕方が違うだけなのかもしれない、と違いを感じながらも共通点を探す日々です。



タイ時代の職場の交流行事の定番はボーリング大会

▶ 現在のお仕事のやりがいとは？

現在はアジアを中心に、タイ以外の国々にも関わる機会が増えています。世界情勢の変化を直接・間接に受けながら仕事をするのは大変ですが、その分、日々が刺激的で、常に新しい発見があります。

数年前には通用していた方法が、今では通用しないこともあり、変化に柔軟に対応する力が求められます。そうした環境の中で、自分自身の考え方や判断力も鍛えられていると感じます。

最近は指導する立場になることも増え、それこそ正解のない課題に悩む場面も多くありますが、だからこそ人と向き合い、試行錯誤することにやりがいを感じています。



▶ 休日の過ごし方は？

週末はバレエのレッスンに通っています。小学生から親世代の方まで幅広い年齢層のレッスンメイトと一緒に、楽しくお稽古しています。学校の話や聞くと懐かしく、ほほえましい気持ちになります。連休には温泉や神社めぐりなどの旅行が

好きで、コロナ禍以降は国内が中心ですが、世界遺産を訪れたり、美味しいものを食べたり、バレエ公演を観たりと、また海外旅行にも行きたいと思っています。



最近の旅行(男鹿半島)のひとコマ



バレエ(発表会にも挑戦)

▶ 今一番大切にしていることは？

今一番大切にしているのは、自分の心の声をきちんと聞くことです。忙しい日々の中でも無理をせず、適度な運動や休息を取りながら、健康な体を維持することを心がけています。周囲の期待や流れに流されすぎず、自分自身が本当に望んでいることに耳を傾けることが、長く働き続けるためにも、日々を心地よく過ごすためにも大切だと感じています。



▶ 今後の抱負も踏まえ、みなさんへメッセージを！

日々の自分なりのお気に入りのルーティンが心地よく、少しずつ保守的になってきたかな、と感じることもあります。

大学やタイでの経験を思い返すと、自分が「普通」と思っていたことが違っていたり、異なる考え方に触れる面白さがありました。初心を忘れず、身の丈に合ったチャレンジを続けていきたいです。自分が本当に好きだったことを見失わないように、これからも丁寧に日々を重ねていきたいと思っています。

狙え！インスタ映え！？

アジア取材雑記
第16回

カンボジア“一带一路”の深い傷跡

皆様こんにちは。TVディレクターの谷澤です。今回はカンボジアからの一枚になります。

同国がかつて、“白砂のビーチリゾート”として大々的に売り出した南部の街、シアヌークビルです。中国の習近平政権が推進した巨大経済圏構想「一带一路」の要衝として注目を集め、

“第2のマカオ”を作るという掛け声のもと、ありとあらゆる中国マネーが流入。近年、中国依存を深め続けるカンボジア政府の姿勢もあって、少し前まで単なる漁村に過ぎなかった街は、空前のバブルに沸いたのです。

あれから5年近く…。皆さま、写真を注意深くご覧下さい。ビーチの脇には、工事が中断したまま放置された、骨組みだけのビルが多く見えます。予期せぬコロナ禍と、中国経済の急減速によって、シアヌークビルへの中国投資は激減。その結果、こうした“幽霊ビル”が、市内に少なくとも400以上も残されてしまったというのです。屋間はまだ良いのですが、日が沈んでしまえば最後、街は実に不気味な雰囲気になってしまいます。「せっかく作り始めたのなら、きちんと完成させてほしい。このままでは街のイメージに差し支える(地元住民)」。“廃墟の街”の実態は思っていたよりはるかにマズいものでした。

何年経っても投資が戻らない想定外の事態。当局は、投資先と連絡が取れなくなった地主や、資金不足に陥った中国人投資家の対応などに追われていました。「どうしたら、この街が復活すると思いますか？日本人の貴方のアイデアが欲しいです」。

インタビュー中に、逆に質問してきた政府高官の姿に、“一带一路”の深い傷跡を感じました。###

(谷澤壮一郎/インドネシア在住)



東南アジアで私が一番好きな場所は中国雲南、ラオス、ミャンマーが重なるエリアです。中国に住んでいるときもミャンマーに住んでいるときもラオスに住んでいるときもこのエリアを訪れました。この写真は年に一度アカ族の新年に合わせて近隣のアカ族が国境を越えて集う「世界アカ大会」をラオス滞在時の2019年に参加したときの写真です。近隣のミャンマー、中国などから民族衣装に身を包んだ多くのアカの人たちが集まってきたのは壮観でした。



はつはるの
山越え集う
アカはひとつ

田邊 知成

ラオス人民民主共和国
ルアンナムター県にて

二〇一九年一月

第十六回 ともに感じる東南アジア